

高齢ドライバーが運転免許返納に至る意識構造及びその要因に関する研究

早稲田大学 学生会員 ○榎本 桃子 早稲田大学 正会員 佐々木 邦明

1. はじめに

我が国における交通事故の状況は近年改善の傾向を示している。その一方で、高齢者の免許保有者数は急増し、75歳以上の高齢ドライバーによる死亡交通事故の割合は増加の一途をたどっている¹⁾。この対策の一つに免許の自主返納制度があるが、交通環境や心理的要因からなかなか返納が進んでいないのが実態である。そのため、実際にどのような要因を経て免許返納を決断したかを明らかにした研究は未だ少ない。

そこで本研究では、免許返納に対する意識的要因に着目し、運転免許返納に至るまでの要因と行動変容プロセスを明らかにし、返納意識の形成に有効と考えられる動機付け要因を明らかにすることを目的とする。返納者のみに向けて設計した調査を行う点、および返納の一要因として高齢ドライバーの交通事故報道が与える影響について考察する点に、研究上の特色がある。

2. 本研究の概要

本研究は、平成31年4月1日より高齢者運転免許証自主返納支援事業に取り組む山梨県上野原市を対象とする。研究の流れを以下に示す。①免許返納者へのアンケート調査：返納のきっかけ、返納前後の移動手段の変化、事故報道の影響に関するデータを収集。②免許返納者へのヒアリング調査：アンケート情報に基づき個々の返納過程に関して仮説を立て、ヒアリングにて検証する。③免許返納過程の質的分析：ライフヒストリー及び返納に関する行動変容プロセスモデルを作成し、返納可意識の向上に有効と考えられる動機付け要因を抽出。④免許保有者へのアンケート調査：③で有効と仮定した動機付け要因を免許保有者に提示し、その有意性を検証する。⑤データの分析：①～④をふまえ、どのような属性を有する高齢ドライバーに、どのような返納の動機付け要因が有効かを考察する。

3. 返納者へのアンケート調査・ヒアリング調査

まず、返納者の返納過程を把握するために平成31年4月1日以降に上記の事業に応募した65歳以上の返納者22人にアンケートを実施し、16人から回答を

得た。サンプル数が少ないため、より詳細なデータを得るためにアンケート回答者のうち承諾を得た4人にヒアリング調査を行った。

表1 返納者対象のアンケート調査内容

大項目	内容、選択肢	
個人属性	性別、年齢、職業、世帯人数、家族構成、免許取得時期、免許返納時期	
返納前の外出目的別の利用手段と頻度	目的	買い物、通院、役所や郵便局、仕事、家族や知人の送迎、その他の趣味など
	手段	自身の運転、電車、バス、タクシー、デマンドタクシー、自転車、周囲の人による送迎、徒歩
	頻度	週何回、月何回
免許返納について	免許返納の検討開始時期	() 年 () 月
	免許返納の検討開始きっかけ	家族からの勧め、友人・知人からの勧め、運転技術への不安、運転の必要性がなくなった、高齢ドライバーの事故報道
	運転技術への不安点	高速道路の運転、夜間の運転、視野の狭まり、聴力の低下、とっさの反応、アクセルとブレーキの踏み間違え、バックでの駐車、認知機能検査の結果など
	免許返納にあたっての不安	生活が不便になる、趣味や交友ができなくなる、身分証明書がなくなる、運転の楽しみがなくなる、遠出ができなくなる、その他
	返納を最終的に決断した最大のきっかけ	自由記述
返納後の外出目的別の利用手段と頻度	目的	買い物、通院、役所や郵便局、仕事、その他
	手段	電車、バス、タクシー、デマンドタクシー、自転車、周囲の人による送迎、徒歩
	頻度	週何回、月何回
返納後のサービス利用	共通利用券を使ったバス・タクシー・デマンドタクシーの利用頻度と目的	
返納後の生活について	満足度とその理由	とても満足、満足、どちらかというと不満、不満、とても不満
	返納してよかったこと	自由記述
報道影響について	よく利用する新聞、よく観るテレビ番組、気になる報道 高齢ドライバーの交通事故報道について感じたこと、周囲の人と話したこと	

	個人属性			返納検討のきっかけ					サービス利用			返納後の満足度			
	住所	性別	年齢	家族	友人	運転技術	必要なし	報道	体調	バス	タクシー	デマンド	満足	不満	もともとペーパー
1	上野原	男	75-79			●		●		●	●		●		
2	ハツ沢	男	80-84	●	●				●						
3	コモア	男	75-79	●				●		●		●			●
4	秋山	女	80-84	●		●			●			●		●	
5	上野原	男	85-89			●		●		●	●			●	
6	上野原	女	70-74			●		●					●		
7	桐原	男	90-	●				●						●	
8	コモア	女	85-89					●			●		●		
9	上野原	男	80-84										●		
10	上野原	女	70-74				●	●		●					●
11	ハツ沢	男	75-79	●		●				●	●	●		●	
12	コモア	女	70-74			●								●	
13	上野原	男	70-74				●			●			●		
14	鶴島	女	65-69	●							●		●		
15	上野原	女	70-74					●					●		
16	上野原	女	75-79			●		●						●	

表2 返納のきっかけ・返納後のサービス利用・満足度

返納検討のきっかけとして、報道の影響を選択したのは9人と最も多く、続いて身体の衰えに伴う運転技術の不安が7人、家族からの勧めが6人なった(延べ人数)。次に得られたデータを、返納に関するライフヒスト

リーおよび行動変容プロセスモデルを用いて考察した。これは、高齢ドライバーの免許返納決断に実際に有効だった動機付け要因を把握することを目的としている。行動変容プロセスモデルについては、態度理論に基づいた藤井²⁾のモデルを用い、返納しようという行動意図を形成した心理的要因として以下の5つを分類する。

- ・態度：好ましさの程度
- ・個人的規範：行動に対する重要な他者の評価の影響
- ・認知行動制御性：行動実行に伴う容易さの程度
- ・道德意識：倫理的な心理
- ・メタ認知：自分自身を客観的に捉えること

なお、返納者に共通してみられた自身の身体能力や運転技術への不安は他に分類できないため、メタ認知として定義し、本研究において新たに追加した。以下にモデルの一例を示す。実線が返納に有効、破線が返納に有効でない要因の関係を表している。

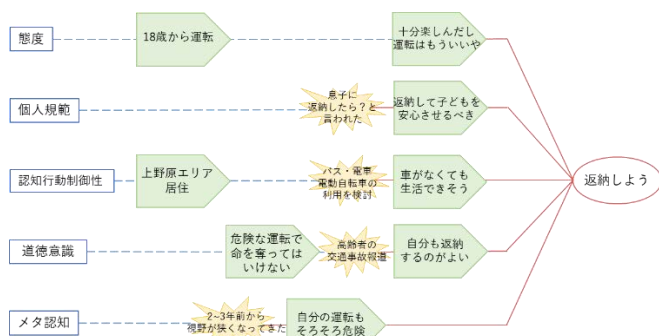


図1 免許返納プロセスモデル

以上の考察から、高齢ドライバーによる交通事故報道と身体能力の衰えに伴う運転技術の低下が免許返納意図の向上に有効な要因であると仮定した。

4. 免許保有者へのアンケート調査

有効な要因と仮定した2項目に関する記事を作成しそれぞれを提示する2種類のアンケートを作成した。



図2 動機付け要因の記事(左:事故報道 右:身体能力)

上野原市の70-85歳の高齢者から、男女比半々で200

人を抽出し、2種類のアンケートを半数ずつランダムに配布した。アンケート内で、記事の提示前に返納について(考えている・少し考えている・考えていない)から選択してもらい、記事を提示したのち、返納について(考えが強まった・考えてみようと思った・変わらない)から選択してもらい、有効性を検証した。200部配布したうち113部を回収し、そのうち81人の免許保有者の返納意向の変化について以下に示す。

表3 動機付け要因ごとの保有者の返納意向変化

返納意向	考えている	少し考えている	考えていない	未回答
81	12	27	40	2
100%	15%	33%	49%	2%
報道	もともと考えている			考えていない
39	15			24
	強まった	変化なし	無回答	検討
39	9	5	1	5
身体	もともと考えている			考えていない
40	24			16
	強まった	変化なし	無回答	検討
40	14	10	0	2

高齢ドライバーの個人属性・運転属性と返納意向の変化との関係性について検定を行った結果、大半では有意とならなかったが、動機付け要因提示前の返納意向の有無と提示後の返納意向の変化の有無においては有意水準1%のもとで有意な差があると示された。

5. おわりに

本研究では、免許返納過程を明らかにすることにより返納に有効と仮定される要因を把握し、実際に保有者に対して有意性があるかを検証した。その結果、すでに返納した人の多くは高齢ドライバーの事故報道、身体能力の衰えに伴う運転技術の不安、および家族からの勧めをきっかけに返納を検討したことが明らかとなった。それを基に、保有者に交通事故報道、身体能力の衰えに伴う運転技術の低下に関する記事を提示した。その結果、記事の種類による有意性には差はみられなかったが、全く返納を考えていない保有者に比べ、すでに返納を考えている保有者に関して記事による返納意識の向上に有意性がみられた。これにより、返納者に有効であった返納検討のきっかけが、返納の検討を開始している高齢ドライバーに対しても有効であることが示された。

本研究の今後の課題として、現段階で返納を全く考えていない保有者に対して有効な動機付け要因を明らかにすることが挙げられる。

参考文献

- 1) 警察庁,平成30年における交通死亡事故の特徴等について, <https://www.npa.go.jp/news/release/2019/20190212001jikosibo> u.html, 最終閲覧 2019/07/23
- 2) 藤井聡(2003)『社会的ジレンマの処方箋 都市・交通・環境問題のための心理学』, ナカニシヤ出版